

## 12月21日(日) ルカの福音書1章26～30節

「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」(28節)

26節の「六か月目」とは、エリサベツが身ごもって六か月目のことですが、御使いガブリエルは、神から遣わされて、ガリラヤのナザレという町の一人の処女、名をマリアという女性のところへ来ました。ガブリエルは、年老いたザカリヤにも現れ、エリサベツの妊娠を告げています。(19節) 27節に「この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで」とありますが、当時のユダヤでは、女はおよそ12歳になると結婚できました。その後の婚姻は、二つの段階により進められました。第一段階は、両者が証人たちの前で、結婚することを公に誓約します。この時に、花婿は花嫁の家族に財政的補償をしなければなりません。このようにして婚約が正式になされ、この段階でこの女は、法的に婚約した男の妻となります。この時から、仮に婚約した女が不貞の罪を犯したりすれば、律法のさばきを受けることとなります。第二段階が、そのおよそ一年後に、花婿が花嫁を自分の家に連れて行き、結婚式を行います。このようにして、この男と女は夫婦となります。

御使いは、マリアに「おめでとう。恵まれた方。主があなたとともにおられます。」と言います。30節に「あなたは神から恵みを受けたのです。」とありますように、神から恵みを受けていることが語られます。もちろん、これまでマリアは多くの恵みを神から受けていたとは思いますが、ここで救い主の母となるという、ある意味特別な恵みを受けたということです。神は、みこころのままに、その人にとって最善の恵みを与えられます。時には、その人にとっては大きな恵みであっても、他の人には恵みと思えないこともあるでしょう。また、他の人はさまざまな恵みをいただいているように見えても、自分は神から十分な恵みを受けていないように思えるかもしれません。しかし、神はふさわしいかたちで、一人一人に恵みを与えていますし、恵みを与え続けてくださっています。私たちが、神から多くの恵みを受けていますし、今年のアドベントにも、多くの恵みを得ていることに、心からの感謝をささげましょう。

## 12月22日(月) ルカの福音書1章31～33節

「彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」(33節)

31節で「あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。」とされていますが、その後に生まれて来る男の子についての説明がなされています。まず、「その子は大いなる者となり、いと高き方の子と呼ばれます。」(32節) いと高き方とは、神ご自身を指す言葉です。ですから、いと高き方の子とは、神の御子ということです。確かに「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。」(ピリピ人への手紙2章6, 7節)とありますが、決して神であることをやめたというわけではありません。むしろ、イエスは、まことの神であり、まことの人であられるお方です。また「神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その支配に終わりはありません。」(32, 33節)とありますが、これは、サムエル記第二7章12, 13, 16節における神がダビデに預言された約束の成就です。すなわち、ダビデに対する預言は、イエスを通して実現すること

となります。もちろん、ダビデ王国であるイスラエルは、二つに分裂し、それぞれがアッシリアとバビロンによって滅ぼされることとなりました。言わば、地上の王国は、永遠ではあり得ません。しかし、ダビデの子孫を通してお生まれになったイエスは、王座がとこしえまでも堅く立つような王国を確立させます。それが、まさに神の国であり、キリストは、神の国を地上にもたらすためにこの地上へ遣わされました。ですから、キリストの到来により確かに地上にあって神の支配がすでに始まっていると言えます。まさに、キリストにある救いを通して、罪と死とサタンの支配から人々が解放されていることこそが、この地上に御国が到来したことの証しです。しかし、私たちが認識していますように、この地上には完全に神の国が来ているわけではありません。まだまだ悪魔が、その力をもって世に影響力を及ぼしています。しかし、キリストが、もう一度この地上に来られた時に、すべての罪や悪が完全に滅ぼされることにより、神の支配が完全なかたちでなされます。私たちは、信仰による希望をもって、その時を待ち望んでいます。キリストは確かに、その支配に終わりのない神の国を実現される方なのです。

### 12月23日(火) ルカの福音書1章34、35節

**「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」(35節)**

---

マリアは御使いに「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。私は男の人を知りませんのに。」と言いました。一見すると、そのようなことが起こるはずがないとのマリアの思いをそこから読み取ることができると考えがちです。しかし、私が今回前後を含めてもう一度この箇所を読み返してみますと、一つのことを気がつかされました。それは何かと申しますと、イエスの誕生とイエスを通してのダビデに対する預言の成就のすばらしさにマリアの目が開かれたのではないだろうか、そしてマリアが、そのような素晴らしい主のみわざに圧倒されつつも、「どうしてそのようなことが起こるのでしょうか。」と、どのようにしてそのようなみわざがなされるのかを御使いに問うているように思うのです。それに対して御使いは、「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。」と言います。つまり、すべては聖霊の働き、つまりいと高き方である神の力によるみわざだということです。「それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」とありますが、イエス様は聖なる者としてお生まれになる必要がありました。なぜなら、人との性交によってイエスが生まれたなら、イエスは罪ある者として生まれることとなり、アダムの性質を引き継いで生まれる者となるからです。しかし、「私は男の人を知りませんのに」と言ったマリアに聖霊が臨み、いと高き方の力がおおうことでお生まれになったイエスこそ、罪なきお方、アダムの罪の性質を持つことのない方としてお生まれになり、このお方こそ、全人類の罪の贖いに最もふさわしい者であり、このイエス以外に人類の罪の贖いをするのできる方はおられません。罪のないお方として、この地上に来てくださり全人類の罪からの救い主となられたイエス様を心からほめたたえましょう。

### 12月24日(水) ルカの福音書1章36、37節

**「神にとって不可能なことは何也不会あります。」(37節)**

---

マリアは、親類のエリサベツの妊娠のことを知らなかったのでしょうか。ですから、御使いを通して彼女の妊娠のことを知らされた時に、エリサベツに会うために出かけて行きました。(39, 40節) クリスマスの記事は、年を取った老父婦で、不妊と言われていたエリサベツに子が与えられ、処女マリアに男の子が与えられているという、人間の理性ではとてもありえないと思うような出来事に満ちています。ある意味、クリスマスは神ご自身がご自分のみわざを通して、「神にとって不可能なことは何もありません」ということを人々に証ししている時ではないかと思われました。

私たちが、クリスマスが出来事を通して、「神にとって不可能なことは何もありません」と信じていることができ、神への信仰がさらに強められていくなら、それもクリスマスの大きな恵みと言えます。私たち自身の日々の歩みにおいて、また教会の歩みにおいて、無力さを感じさせられることが多くあり、それが時にはあきらめになったり、絶望感につながることもあるでしょう。しかし、私たちがクリスマスの出来事は、すべて事実だと信じていることにより、神のみわざを通して、エリサベツやマリアも子を宿したことを私たちが信じていることができるなら、私たちも「神にとって不可能なことは何もありません。」と信じて、ともに主の御名をたたえることができるようにされます。その信仰は、私たちの信仰生活をどれほど励まし、教会が、この世にあって力強く前進して行くために、どれほどの確信を与えることでしょうか。クリスマスの出来事を通して、「神にとって不可能なことは何もありません。」と言える信仰が与えられていることを心より感謝し、もうすぐ迎えようとしている新しい年も、「神にとって不可能なことは何もありません」との信仰をもって歩ませていただきたいと願います。

## 12月25日(木・クリスマス) ルカの福音書1章38節

**「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」**

---

一方的に御使いは、マリアが身ごもって男の子を産むこと、その名をイエスとつけるようにと、主からのことばを語ります。もちろん、マリアはそれを拒むこともできたはずですが。神は無理やり人をご自分のみこころに従わせることをなさないからです。しかし、マリアはここで「私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」と、主への服従を明らかにします。はしためとは、下女とか女召使いという意味ですが、マリアは自らはしためとなることを願いました。すなわち、信仰をもって完全に神のことばに従う意思を現したのです。この後、いいなずけの状態であったマリアが妊娠することで彼女自身がどうなるかは分かりませんし、ヨセフも悩みました。しかし、それらのことをすべて神にゆだねて、マリアは主のはしためとして主の言われることに従う決心をしたのです。これが懺身です。

御使いは、マリアに「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」「恐れることはありません。マリア、あなたは神から恵みを受けたのです。」と言われました。本来、はしためは、ただ一方的に主人の命令に従うだけで、決してはしためが主人の目にとまったり、感謝されたりすることはありませんし、当然恵みを受けることはありません。しかし、主のはしための場合には、主人である神ご自身が、はしためとして召された一人一人に目を留め、豊かに恵みを与え続けてくださいます。これが、主のはしための姿です。これほど恵まれたはした

めが世の中にいるのでしょうか。私たちは、このクリスマスの時に、イエスキリストの救いを通して、世界で最も幸いなはしめとして召されたことに心から感謝をささげましょう。

## 12月26日(金) サムエル記第一14章31～35節

**「サウルは主のために祭壇を築いた。これは、彼が主のために築いた最初の祭壇であった。」  
(35節)**

イスラエルは、ペリシテが陣を張っていたミクマスからアヤロンに至るまでペリシテ人を討ちました。これは、イスラエルが西に約32キロ進んだこととなります。この距離は、休まず歩いても6～7時間はかかるでしょう。何も食べないでこれだけの距離を進軍したのですから、イスラエルの兵たちはどれほど疲れていただろうかと思えます。32節で、いよいよがまんできなくなったのでしょうか、それともヨナタンが蜜を食べ、「もしも今日、兵たちが、自分たちが見つけた敵からの分捕り物を十分食べていたなら、今ごろは、もっと多くのペリシテ人を討ち取っていただろうに。」(30節)の言葉が心に残っていたのでしょうか、そのあたりは分かりませんが、いずれにしても分捕り物に飛びかかり、羊、牛、若い牛を取り、その場で屠り、血がついたまま食べました。動物の血を抜かず肉を食べることは、肉のいのちは血の中にあると律法で明言され、厳格に禁じられていました。(レビ記17章11節、申命記12章23節参照)「ご覧ください。兵たちが血のままで食べて、主に罪を犯しています」とサウルに告げているのは、そのような意味があります。それに対して、サウルはまず「おまえたちは裏切った」と批判します。王が言ったことを守らなかったということです。それとともに、34節では血がついたままではなく、適切に処置をして食べるようにと命じています。そして、35節でサウルは、主のために祭壇を築き、「これは、彼が主のために築いた最初の祭壇であった」とあります。ここで、サウルが敬虔な信仰をもって祭壇を築いたかどうかは疑わしいなど、ネガティブな解説も散見されます。もちろんサウルがどのような思いをもって祭壇を築いたのかは分かりませんが、主のために祭壇を築くことは評価してもいいのではないかと思います。しかし、遅いという印象は拭えません。もう少し早く主に祭壇を築くことを心がける信仰がサウルにあれば、サムエルによって非難されることもなかったでしょう。(13章13, 14節参照) 私たちも思い出したかのように主の御前に入る信仰ではなく、常に主の御前でみこころを尋ね求めて祈る信仰者でありたいと思わされます。

## 12月27日(土) サムエル記第一14章36, 37節

**「しかしその日、神は彼にお答えにならなかった。」(37節)**

31節にありますように、ミクマスからアヤロンに至るまでペリシテ人を討ち、大きな戦果を取ったサウルは、さらに夜通しペリシテ人を追撃して戦い、彼らからかすめ奪い、一人も残しておかないようにしようと言います。しかし、夜に敵を追撃すると慣れない場所では道に迷う危険があり、敵に待ち伏せされる恐れもありますから、本来であれば避けるべきことでした。さらに兵たちも疲れ果てていましたから、本来であれば休ませるべきでしたが、サウルは敵を滅ぼすことしか眼中になかったのでしょうか。私たちも物事がうまくいっている時にこそ気をつ

けなければ目の前のことしか見えなくなって思わぬ失敗をしてしまうことがあります。広く物事を見る目を養うことも大切です。

サウル王の命令に兵士は逆らえませんから、「あなたが良いと思うようにしてください。」と答えます。しかし祭司が「ここで、われわれは神の御前に出ましょう。」と言います。ここで主のみこころを求めるべきことは、ペリシテ人を追撃すべきかということと、主はペリシテ人を自分たちの手に渡されるのかということでした。しかしその日、神は彼にお答えになりませんでした。ここで考えられることは、神はサウルがしようとしていることをみこころとされなかったということであり、主はこれ以上ペリシテ人を追撃することを望まれなかったということです。サウルからすれば「なぜだ」と思うかもしれません。しかし、サウルは主がお答えにならなかったことを受け入れて、兵を引き上げるべきでした。

私たちが、主に祈った時に主はお答えにならない時があります。一つの考え方としては、私たちの忍耐を養うために、主は私たちにすぐに答えを下さらないということもありますが、もう一つの考え方として主が明確に、その考えや願いを否定しているということがあります。それでも私たちは、なおも進んで行こうとしますが、主のみこころでないことをいくら私たちが行おうとしても、そこに決して祝福はありません。私たちも、自分の願いや考えを脇に置き、主のみこころだけを求め、主がそのことを喜ばれず沈黙されているように感じれば、謙遜にそれに従う信仰を持たせていただきたいと思わされます。